

# アメリカ国民経済学と「レイモンド・リスト問題」(下)

高 橋 和 男

1. 問題の所在
2. リスト国民経済学の源泉
  - (1) リストとアメリカ
  - (2) 経済学のアメリカ的体系
3. レイモンド対クーパー
  - (1) 「国民」と「国民的富」
  - (2) 「資本蓄積」
  - (3) 「生産的労働」 (以上, (上) 59巻2号)
4. 『アメリカ経済学概要』の源泉
  - (1) 『アメリカ経済学概要』の成立事情
  - (2) 「パーカー版」本篇＝理論篇の分析
  - (3) 「パーカー版」付録＝政策篇の分析
  - (4) 『アメリカ経済学概要』の特質 (以上, (中) 59巻4号)
5. アメリカ国民経済学とリスト
  - (1) リスト「生産諸力の理論」の起源
  - (2) スミス生産的労働論批判の源泉
  - (3) 古典派資本蓄積論批判の源泉
  - (4) 「レイモンド・リスト問題」の再審
6. 結論：レイモンドの復権 (以上, (下) 本号)

## 5. アメリカ国民経済学とリスト

フリードリッヒ・リストの体系的著作第二作は、1927年刊行の『リスト全集』第4巻において、90年ぶりに陽の目を見た『経済学の自然的体系』である。1837年秋、失意のうちに移り住んだばかりのパリで、フランス・アカデミーによる懸賞論文の募集を偶然知ったリストが、不慣れな外国語で短期間に書き上げたと言われるのが本書の稿本である。この、いわゆるパリ草稿の存在は、1913年に既にデシュタル (E. d'Eichthal) によって学会で報告されていたが、その翻刻は平和の回復を待たねばならなかった。『リスト全集』第4巻には、編者サリーンによるその対訳とともに、同ゾンマーによる以上の経緯を含む長大な序文と注釈が収められた。

『自然的体系』の刊行を機に、「レイモンド・リスト問題」の形勢は逆転した<sup>1)</sup>。

リストの主著『経済学の国民的体系』の成立との関連で『アメリカ経済学概要』（以下『アメリカ経済学』）が占める比重は大幅に低下し、付随的に、「レイモンド・リスト問題」への研究者の関心も後退した。全10巻12冊から成る『リスト全集』の完結それ自体が弾みとなり、リスト研究の新たな展開を必至とした。が、同時にその過程で、『全集』の有無を言わせぬ権威化が生じ、編者の作品解題や注釈が、絶対的な評価基準として、ややもすると、研究者に無批判的に受容される事態を招いたことは否めない。本稿（上）で筆者はこれを「『リスト全集』が敷いた軌道」と表現したが、まさにシュンペーター曰く、「知識とか習慣はすべて、いったん獲得されると、大地における鉄道の土手と同じくらい堅固にわれわれのうちに根付く」性質を持つからである。こうして、『自然的体系』の「思想的源泉」として『リスト全集』第4巻においてゾンマーによって積極的に評価された著者や著作以外、リスト研究者によってほとんど顧みられなくなったことは、かえすがえすも残念なことであった<sup>2)</sup>。

以下本節では、『自然的体系』を重視するゾンマーらのテキスト解釈上の問題点を検討することにしたい。

#### (1) リスト「生産諸力の理論」の起源

『アメリカ経済学』における学問的達成を、リスト自身は主著の「緒言」において第三者による自作の評価という体裁をとりつつ、つぎのように語っている。

「フィラデルフィアの工業・技術促進協会の記録からの抜萃。

フリードリヒ・リスト教授が、事物の本性にもとづく、政治経済学と世界主義経済学との区別、生産諸力の理論と価値の理論との区別によって、またそれに立脚する論証によって、自然に即した経済学の新体系を創造されたことを、そしてこれをつうじて合衆国の

1) Friedrich List, *Le Systeme Naturel d' Economie Politique*, 1837, in *Schriften, Reden, Briefe*, Bd. , hrsg. von Edgar Salin und Artur Sommer, Berlin: Reimer Hobbing, 1927. 「人文・社会科学アカデミー」の1837年度の出題は二つあった。「国民が、コマーの自由を確立しようと、あるいはその関税立法を変更しようと提案するとき、国内の生産者の利害と消費者大衆の利害とを、最も公平な方法で調停するために、考慮しなければならない事実とは何か」、に対し、リストが「祖国と人類に」の標語で応募したのが『自然的体系』であった。もう一つの問題、「両世界で目下普及しつつある動力と輸送手段とが、諸国民の物質経済、市民生活、社会状態および力におよぼす影響とはどのようなものか」、に対してもリストは応募していた (*Le monde marche.*). Cf. Friedrich List, *Die Welt bewegt sich*, hrsg. von Eugen Wendler, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1985. 『全集』以後の重要な草稿発見の一つである。いずれもリストは選にもれた。

2) Artur Sommer, "Die positiven Quellen der Preisschrift," in Einleitung, in *Schriften*, Bd. , pp. 50 145. J. A. Schumpeter, *The Theory of Economic Development*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1949, p. 84.

ために大いに貢献されたことを、公表する件、以上決定。

リスト教授に懇請して、氏の理論の基礎を展開する学術的な本と、氏の体系を諸学校にひろめることのできる一般的な本との、二冊を書くことを求める件、以上決定。」<sup>3)</sup>

原文は、『ナショナル・ガゼット』誌に当時連載中のリストの論説「アメリカ体制」を『アメリカ経済学概要』の題名で出版する旨決議した「ペンシルヴェニア製造業・職工技術促進協会」(通称ペンシルヴェニア協会)の1827年11月21日の議事録から写しとられ、リストに手渡されたものである。写しには翌日の日付と同協会副会長 C. J. インガーソルならびに同書記 R. フィッシャーの署名がある。この英語原文には、リストによる翻訳の下線部にあたる表現や語句は全く見あたらない<sup>4)</sup>。日本語版の訳注は、「後者は前者の翻訳ではない」と指摘するが、そう言えるのは下線部に限られ、他の部分は引用を割愛した部分を含め必ずしもそうではない<sup>5)</sup>。おそらく自惚れや巧名心からこのような作為に及んだのであろうが、そこには他者によるそのような評価へのリストの期待や願望がひそんでいるとみなければならない。つまり、他でもなく『アメリカ経済学』において、自分は「自然に即した経済学の新体系を創造」したのだという、リストの自負と偏見とが。

文字に残された記録なら何であれ「証拠」として重視するリスト研究者が、リスト自身が書き残した「証拠」を無視するのは何故であろうか。『自然的体系』において「国民経済学の『新しい体系』を描いた」、とする諸田實氏の近著における評価は、ゾンマーに端を発するものであって、リスト自身のものではないことが銘記されねばならない<sup>6)</sup>。

「自然的体系は、根本において、リストの思想の最初の完全な体系的な総括である。というのは、[アメリカ経済学] 概要が、かなりの程度、アメリカの事情に関する状況的著作であるからである。パリ草稿は、リストによるその後の体系的理論化の、より広汎な概念的形象化の、きっかけとなった。すなわち、生産諸力の理論が1839年と1841年の間に、弁別され、より掘り下げられる。セー、スミス、その他への取り組みは、古典派との対話のかなりの拡大をもたらした。」

3) Friedrich List, *Das nationale System der politischen Ökonomie*, 1841, in *Schriften*, Bd. , hrsg. von Artur Sommer, pp. 14-15 (小林昇訳『経済学の国民的体系』, 岩波書店, 1970年, 11頁。)

4) William Notz, Einleitung zum *Grundlinien einer politischen Ökonomie und andere Beiträge der amerikanischen Zeit 1825-1832*, in *Schriften*, Bd. , hrsg. von William Notz, p. 26.

5) 小林訳『国民的体系』, 493頁。

6) 諸田實『フリードリッヒ・リストと彼の時代——国民経済学の成立——』有斐閣, 2003年, 263頁。Sommer, Einleitung, in *Schriften*, Bd. , pp. 7-8.

ゾンマーのこのような解釈を根拠に、諸田氏は、『アメリカ経済学』を「アメリカの事情に対する時論的性格が強い」著作とみなしたと思われる。しかし、『自然的体系』が『アメリカ経済学』ほどには「状況的著作」でない、などとはたして言えるのであろうか。逆に、『アメリカ経済学』が「リストの思想の最初の完全な体系的な総括」でないと、ゾンマーはどうして言えるのであろうか<sup>7)</sup>。リストは、アメリカでの生活を通して——この「経済学について読むことのできる最良の著作」を通して——、「国民経済の段階的発展」を明瞭に認識し、また、「輸送手段の性質とそれが諸国民の知的・物質的生活にあたえる影響」をよく理解した、と主著の「緒言」で書いていないだろうか<sup>8)</sup>。そこではまた、(渡米前の)過去の勉強と経験にアメリカでの生活が加わり、成立したのが、「地盤のない世界主義に立脚しているものではなくて、事物の自然に、歴史の教えに、そして諸国民の必要に立脚している」「一つの体系」である、と書かれていないだろうか<sup>9)</sup>。

このように、『国民的体系』の「緒言」に即して解釈するかぎり、「生産諸力の理論」を『アメリカ経済学』において展開したという、リストの主張は顔面通り尊重されなければならない。リストの主張には誇張や独善が見られるとしても、また、「生産諸力の理論」という呼称が、文献的には、『自然的体系』においてはじめてリストによって使用された、とするゾンマーの挙証は無視できないにしても、問題はむしろ、リストの「生産諸力の理論」とはいかなるものか、何か、という、ゾンマーによるその内容 (= die Lehre) の理解の仕方に関わる、と言わねばならない<sup>10)</sup>。

さらにもうひとつ問われるべき重要な問題がある。ゾンマーの解釈に沿いつつ諸田氏が主張するように、「しかし、『国民的体系』の核心ともいえる生産諸力の理論は、古典派の学説に対する批判と並んで、『自然的体系』以後に大きく発展している」(強調は引用者)、とすれば<sup>11)</sup>、それは、理論的にどの点であり、そして、何故か、という問題である。懸賞論文の擱筆から4週間後に、レイモンドやケアリーやクーパーらの著書を自宅から持参するよう妻に指示したりリストの動機は何だったのか、その理由を探らねばならない。『自然的体系』をあわただしく書

7) 諸田氏の説く仮説、「『国民的体系』の成立の3つの局面という見方」(あとがき)では、『アメリカ国民経済学』は、リストがその「国民経済学」の「構想」を宣言した段階 (= 第2局面) にとどまる。氏によれば、リストがドイツにいた1820年頃に、すでに、「シャブタルをはじめフランスの経済学者の著書を読んで、保護関税の効果、個人経済と国民経済との違い、交換価値と生産諸力の理論との違いを知っていたことも、確証されている」が、この頃 (= 第1局面)、リストがそうした違いについて実際に書いていたわけではない。『アメリカ経済学』において、リストが「思想の世界での突破」を果たしたのか否か、氏の構想段階 (= 第2局面) というその把握からは審らかではない。

8) List, NS., pp. 13-14 (小林訳9頁)

9) リストは、「緒言」以外でも、「経済学の新体系の概要」の標題で「自分の体系」を展開したと述べる。List, NS., p. 194 (小林訳220頁)

10) Sommer, Kommenter, in *Schriften*, Bd. , pp. 566 ff.

11) 諸田『フリードリッヒ・リスト』, 264頁。

き上げる過程で、リストはこれらの著書の有用性・価値を再認識したのではないか、というのが筆者の解釈である。懸賞論文の執筆を機に、『『国民的体系』に向けて勉強を始めた』リストによって、これらのアメリカの著作があらためて必要とされ、参照された理由について以下推理してみたい<sup>12)</sup>。

## (2) スミス生産的労働論批判の源泉

次頁に掲げた表は、リストの「生産諸力の理論」を構成する諸要素を、多少便宜的ではあるが四つのグループに分類したうえで、三つの著作の間におけるそれらの対応関係を示したものである。一口に「生産諸力の理論」といっても、それがいくつかの次元、さまざまな要素からなることが分かる。構成要素はもちろん他にも考えられうるが、リストの「生産諸力の理論」の特質として、真っ先に指を折られるものばかりと言ってよいだろう。とりわけ、理論的要素に分類した諸要素の重要性に関して異論は少ないはずである。以下この表を念頭におき、通説の問題点を検討してみよう。

ゾンマーが『自然的体系』に「生産諸力の理論」の発展をみるのは、ここに、その完全な呼称が初めて登場するだけでなく、スミスの生産的労働論に対するリストの批判が、やはり「ここで初めて登場する」、という理由からである。つまり後者は『アメリカ経済学』には存在しない、と。事実、『自然的体系』におけるゾンマーの詳細な注釈を検討すると、彼がリストの「生産諸力の理論」を、そのスミス生産的労働論批判にもっぱら還元して理解している節がある。ゾンマーはリストのそうしたスミス批判を「質的労働論」と呼び、これを「徹頭徹尾オリジナル」な貢献として評価する。しかしながら、このようにスミス生産的労働論批判の展開をひとつの根拠に、『自然的体系』を、「リストの思想の最初の完全な体系的な総括」とであると位置づけることは疑問である<sup>13)</sup>。

まず第一に、「徹頭徹尾オリジナル」と言いながらも、スミス労働概念へのリストの批判にルイ・セーの影響があった可能性をゾンマーは否定しない。本稿(中)で詳論したように、リストが『アメリカ経済学』において提起した、ルイ・セーから借用したと推測される「知的資本」論は、ゾンマーが「質的労働論」と呼ぶ知的(精神的)労働論にほかならない。その意味では、『アメリカ経済学』にスミス生産的労働論批判が存在しない、とは言えない<sup>14)</sup>。そして、

12) 本稿(上)を参照。自明のことだがリストはこれらの著書の内容を事前知っていたことになる。

13) Sommer, Kommentar, in *Schriften*, Bd. , pp. 573, 633.

14) 本稿(中), 98-99頁を参照。「知的資本」は“a capital of mind”の訳語。List, *Outlines of American Political Economy*, in *Schriften*, Bd. , p. 117. ケーラーによるそのドイツ語訳は“ein geistiges Kapital”である。Curt Köhler, *Problematisches zu Friedrich List. Mit Anhang: Lists Briefe aus Amerika*, Leipzig: C. L. Hirschfeld, 1908, p. 200. 付録の翻訳の底本「パーカー版」が第12信を欠くことは既述の通り。本書第2章は『アメリカ経済学』の分析にあてられていて、依然有用である。『国民的体系』序論に、「外国の生産諸力(物質的ならびに精神的資本、企業者、

リスト「生産諸力の理論」の諸要素と体系的展開

	『アメリカ経済学』	『自然的体系』	『国民的体系』
<主体的要素>			
国民国家	2・6信		緒言・15・31章
<理論的要素>			
国民経済発展段階論	2・5・7信	9 11・18・35章	序論・10・15・18章
農業・工業・商業調和論	2・12信	16章	序論・13・17 25章
(物的) 資本蓄積論批判			12・19・31章
スミス生産的労働論批判	4・5信	3・4・33・34章	12章
知的資本(知的労働)論	4信	14・33章	序論・12・19章
国民的人材育成の原理	4信	3章	序論・12・19・25章
<政策的要素>			
保護関税	2信	15・21 23章	24 27章
通商条約 (メシュエン条約)	3信	27・28章	5章
植民地領有		17章	22・23章
農産物自由貿易 (= 垂直分業) 論	7・11信	1・5・7・17・29・34章	22章
<制度的要素> (注)			
法による生命・財産の保護	2信		12・13章
思想と信教の自由	5信		12・13章

(注) リストは他に以下のような諸要素を列挙する。狭義の 制度的要素 というより、 文化的要素 とした方がよいものも含まれている。キリスト教、一夫一婦制、奴隷制と農奴制の廃止、王位の世襲、字母書法・印刷機・郵便・貨幣・度量衡・暦・時計の発明、治安警察、自由な土地所有制度の実施、輸送手段、司法の公開、陪審裁判、議会による立法、国家行政の社会的監査、地方自治、出版の自由、公益目的のための結社等々。(小林訳『国民的体系』、第12章203頁。)『自然的体系』では最初の三つが、イスラム教、一夫多妻制、奴隷制・農奴制と対比されている。Cf. List, SN., p. 528 (Eng. p. 184.).

何よりも重要な点は、『自然的体系』においてもリストがスミス生産的労働論を全面的には否定しないことである。「生産諸力の理論」と対立する『価値の理論』を、それだけを独立させて見るならば、スミスの生産的労働論は成り立つ、とリストは捉えるからである。「価値の理論」と「生産諸力の理論」の棲み分けというリストのこの認識は、『アメリカ経済学』におけ

---

技術者および労働者)」という興味深い記述が見出される。List, NS., p. 58 (小林訳64頁)。この部分のハーストによる英訳は、“foreign productive forces (material and intellectual capital, entrepreneurs, skilled and unskilled workmen),” となっている。Margaret E. Hirst, *Life of Friedrich List and Selections from his Writings*, London: Smith, Elder & Co., 1909, p. 317. 『国民的体系』の二種の英訳は geistiges Kapital を, “moral capital” (G. A. Matile 訳), “mental capital” (S. Lloyd 訳) としている。「知的資本」とあえて訳した理由は、筆者がルイ・セーのリストへの影響を重視するからである。

る「物的資本」と「知的資本」(および「自然資本」)の平行的・二元的把握と同根のものである、その延長線上に位置づけられうる。ゾンマーはこの重要な論点を看過している<sup>15)</sup>。

ちなみにゾンマーが、『アメリカ経済学』において最初に提起されたリストの「知的資本」概念と、それへのルイ・セーのありうべき影響に目を向けることなく、『自然的体系』にのみリストの「質的労働論」の展開を見、かつ、そこでのみルイ・セーのありうべき影響を云々するのは、恣意的であるばかりか、ゾンマーの強調する“positive Quelle”論そのものの再考を迫る深刻な自己矛盾、と言わざるをえない。というのは、『自然的体系』における「知的諸力」ならびに『国民的体系』における「知的資本」、両概念の「想原」として、ゾンマーは、シャブタル、デュパン以外にルイ・セーの著書を挙げるだけではなく、レイモンドの「効果的労働」概念にも言及するからである。しかし、「スミスの〔労働の〕生産性概念に対する」リストの批判は、シャブタルやデュパン、ルイ・セーの「眼前にある批判から出発」したと指摘するとどまり、ゾンマーはレイモンドの独創性を高く評価しながらも、決してリストの「想原」として認めようとはしない<sup>16)</sup>。

第二に、スミス生産的労働論に対する批判が『アメリカ経済学』には存在しない、というゾンマーの主張は、第4信においてリストが提出した「知的資本」概念の系論としての国民的人材育成論を、ゾンマー自身が「生産諸力の理論の最初の萌芽」とみなすことから、支持しがたい。リストは第4信で、縮絨業を起業することで自己の境遇を改善しようとするファーマーが、不足する「スキルと経験」を子弟への教育投資によって獲得するケースを挙げ、「知的資本」概念を敷衍する。リストによれば、ファーマーは、「この物的資本 [= 教育投資] において失った額を、彼の生産力の増加によって10倍以上に償った」ことになる<sup>17)</sup>。リストは、このような現代経済学でいう「人的資本 (human capital)」論を、のちに『国民的体系』第12章

15) List, SN., pp. 200, 538, 540. 『アメリカ経済学』第4信のリストの記述を引用しつつ、「ここでは、『自然資本、知的資本、物的資本と、一国民の生産諸力』との間で、区別がなされる。」とするゾンマーの注釈は、原文の誤った理解を反映する。Sommer, Kommentar, in *Schriften*, Bd. , p. 567. 諸田『フリードリッヒ・リスト』272頁は、『四季報』掲載論文「国民的工業生産力の本質と価値」(1840年1月)にリストのかかる認識を見る。

16) Sommer, Kommentar, in *Schriften*, Bd. , p. 569 a). リストは、『アメリカ経済学』はもとより、『自然的体系』においても、ルイ・セーの名前を挙げたことがない。しかし、その影響は明瞭に看取される(脚注22を見よ)。私信で(1822. 5/1)言及したことを除き、リストによる引用や言及がないという点ではルイ・セーと同格のはずのレイモンドだが、「想原」としてのゾンマーによる評価は、ルイ・セー以下である。Ibid., p. 573. ちなみに、ルイ・セーにもレイモンドと同様「効果的労働」(travail effectif)、「生産的労働」(travail produit)という表現があることにゾンマーは一切触れない。もちろん、レイモンドのそれが先行した。Cf. Louis A. Say, *Considerations sur l'industrie et la legislation...*, Paris: J. P. Ailland, 1822, pp. 32 3.

17) Sommer, Kommentar, in *Schriften*, Bd. , p. 567. List, *Outlets*, in *Schriften*, Bd. , pp. 121 22.

他において「国民の工業的育成の原理」と呼んで、その意義を大いに強調するようになるが、ゾンマーが注釈で指摘するように、「将来の国民生産力の育成」たる人的資源への投資（＝人的資本）の重要性を、リストは最初の体系的著作である『アメリカ経済学』において、明確に説いているのである<sup>18)</sup>。

第三に、このように「知的資本」論と「国民生産力の育成」原理とを説いた『アメリカ経済学』に、スミス生産的労働論批判が存在しないとすれば、不可解と言わねばならない。リストはその第5信で、「法曹，外科医，牧師，判事，立法者，行政官，文筆家，作家，教師，音楽家，俳優」といった「人間の努力は」，合衆国では、「生産諸力をはなはだ増大させる傾向をもつ」，と述べて、これらを「不生産的階級」として括ったスミスと客観的に対立しなかっただろうか<sup>19)</sup>。ゾンマーは、『アメリカ経済学』において「リストの特別な攻撃目標」となったトマス・クーパーが、スミス生産的労働論に異を唱えた事実を看過するばかりか、クーパーがそれを、リカーディアンとしての先達マカロックの『経済学原理』から吸収した可能性に全く思いを致さない。クーパーの著書を読んだリストが、同書で推賞されたマカロック著『経済学原理』の事実上の初版ともいえるべき、マクヴィッカー編『経済学概要』を読んで、編者によるレイモンドへの言及を目にした可能性については既に示唆したが、その際マカロックのスミス生産的労働論批判をリストが目にした可能性についても、ここであらためて注意を喚起しないわけにはいかない<sup>20)</sup>。ゾンマーは、『自然的体系』ではなく、『国民的体系』への注釈ではじめて

18) 「保護関税によって国民がこうむることとなる損失は、いつの場合でもただ価値にかんするものであるが、そのかわりに国民は諸力を獲得し、これを使っていつまでも、莫大な額の価値を生産することができるようになる。したがって価値のうえでのこの失費は、もっぱら国民の工業的育成の費用とみなすべきものである。」List, *NS*, p. 57 (小林訳63頁)。この「国民の工業的育成の原理」(das Prinzip der industriellen Erziehung der Nation)は「序論」, *ibid.*, p. 46 (小林訳51頁)が初出ではなく、1839年の仏文「歴史の審判を受ける経済学」に登場する。ちなみに、ロイド訳1904年版に寄せた序文においてニコルスンは、『国民的体系』の思想的特質の一つに、国民国家、非物的生産諸力（資本蓄積）などとともに、この「国民の工業的育成の原理」を挙げる。*The National System of Political Economy By Friedrich List, ...*, with an introduction by J. Shield Nicholson, London: Longmans, Green and Co., 1916, xix.

19) List, *Outlines*, in *Schriften*, Bd. , pp. 126-27. Say, *Considerations*, pp. 97-8 のスミス批判を見よ。

20) 「スミス博士は、蒸気機関を修理するために雇われた労働者の正しい肩書きが、生産的階級に登録されることをためらわずに認める。にもかかわらず、アークライトとかワットとかの生命を救う手柄をたてた外科医を、不生産的階級に平然と含める。」[John R. McCulloch,] “Political Economy,” in *Supplement to the Fourth, Fifth, and Sixth Editions of the Encyclopaedia Britannica*, Edinburgh, 1824, vol. 6, pp. 216-278. 引用は p. 275. マカロックのこの論説に注釈を加え単行本としたものが、John McVickar, *Outlines of Political Economy...*, New York: Wilder & Campbell, 1825である。引用文はその p. 165に見出される。ノッツは、クーパーのマカロックへの依存が、このマクヴィッカー版によって可能になったことを知りながら、なぜか後者に一切言及しない。Notz, *Kommentar*, in *Schriften*, Bd. , p. 366. クーパーの「生産的労働」論については、



マカロックのスミス生産的労働論批判に言及するが、やはりそこでもクーパーの類似の議論を紹介することはなく、あえてレイモンドの著書からの引用を行う。クーパーに対して公平な扱いを欠くだけではなく、作為的でさえある<sup>21)</sup>。

以上、リストのスミス生産的労働論批判は『自然的体系』においてはじめて説かれたとするゾンマーの解釈に、三点にわたって疑問を提起した。同書の第33章「関税立法に関する経済学の諸体系の精神について」において、「労働の生産的諸力の諸原因」をスミスは理解しそこなった、すなわち、「知的諸力は、生産的諸力を生産するのに、その働きを認識しそこなった」、とリストは批判するが<sup>22)</sup>、『アメリカ経済学』でも、ルイ・セーの名を挙げることなく、肉体的労働を制御する「知的資本」の役割について述べていた(本稿(中)を参照)。同様に、第14章「工業力の発展は農業から資本を奪うか」においても、リストは『国富論』第4篇第2章冒頭の数段落をやはり引用しつつ、スミスによる「資本」概念の乱用を批判するが、そこで説かれた「知的資本」(*un capital intellectuel*)論は、『アメリカ経済学』第4信の二番煎じと言わざるをえない。リストの「生産諸力の理論」を構成するこの最も本質的な要素を『アメリカ経済学』に認めようとはせず、『自然的体系』におけるその理論的發展(*Weiterbildung*)を強調するゾンマーの説は首肯しがたい<sup>23)</sup>。

### (3) 古典派資本蓄積論批判の源泉

リストによる生産的労働論批判の展開に『自然的体系』の理論的飛躍を見るゾンマーが、資本蓄積論の有無に関心を示さないのは不可解である。本稿(中)の結論で指摘したように、スミスやセーの「価値の理論」を批判して、それから独立した「生産諸力の理論」の建設を提唱するリストが、前者の根本原理である資本蓄積に関して『アメリカ経済学』で沈黙した事実ほ

---

本稿(上), 64-65頁を参照。

マカロック研究の第一人者オブライエンのつぎの指摘は、リストとのその思想的類縁性を示唆して興味深い。マカロックは、「経済発展の基礎過程を、資本蓄積(しかし人的資本を含む)と分業を伴うスミスの概念装置によって、基本的には理解した。」(強調は引用者) *The New Palgrave: A Dictionary of Economics*. したがって、リストとクーパーもこの限りでは意外に近いということになろう。

21) Sommer, Kommentar, in *Schriften*, Bd. , p. 568. ちなみに、小林昇氏による全124の訳注にレイモンドの名は見出せない。アメリカ国民経済学も『アメリカ経済学』も、氏の『国民的体系』理解においてきわめて影が薄い。

22) List, *SN.*, p. 532.

23) List, *SN.*, pp. 290, 292, 294. Sommer, Kommentar, in *Schriften*, Bd. , p. 568. Artur Sommer, *Friedrich Lists System der politischen Ökonomie*, Jena: Gustav Fischer, 1927, pp. 49-50. n. 3. スミス生産的労働論批判は、レイモンドにも、ルイ・セーやクーパーにもある。少なくとも後二者を精読したリストが、最初の体系的スミス批判の試みにおいて、この論点を見逃すことがあるだろうか。

ど、レイモンドへのリストの対抗意識を示唆する「証拠」もない。『自然的体系』でもまた、後発資本主義国の経済発展の諸条件を論じながら、リストが節約と資本蓄積に言及することはない。したがって、先のスミス生産的労働論批判も、実は、レイモンドが行ったような「資本に雇用される労働」（『国富論』第2篇第5章）批判にはなっていない。少なくとも、生産的労働と資本蓄積との論理的関連についての自覚は『自然的体系』のリストには希薄である。ゾンマーの注釈はこの論点を見落としている。

ちなみに、「レイモンド・リスト問題」の再考を促す論稿で、キース・トライブが、『アメリカ経済学』第2信の記述を根拠に、「ここでの大きな目標は、資本の蓄積ではなく、国民的資産として理解される国民的生産諸力の上昇であった」とコメントするが、引用された文章に「資本の蓄積」を直接指す表現はなく、勇み足と言わざるをえない<sup>24)</sup>。しかしながら、他方、レイモンドが、スミスの意味では「蓄積」を否定することをトライブが正しく把握した点、そして、『国民的体系』におけるリストの古典派経済学批判を、富と物的資本蓄積とのその同一視に的確に求めた点は、高く評価されねばならない<sup>25)</sup>。リストに与えたレイモンドの影響如何という問題に、スミス資本蓄積論批判を媒介にしてアプローチした研究者を、筆者は寡聞にして他に知らない。トライブによって「レイモンド・リスト問題」に一石が投じられた、と言ってよい。

とはいえ、リストが、「価値の理論」に対する批判の一環としていわゆる「節約理論」(die Ersparnistheorie)を俎上に載せるのは『国民的体系』(第19章)においてであって、『アメリカ経済学』においてでも『自然的体系』においてでもない<sup>26)</sup>。それ故、『国民的体系』における「生産諸力の理論」の体系的完成を説明しようとすれば、経済発展段階説の彫琢や歴史篇の拡充といった諸側面とともに<sup>27)</sup>、リストによる新たな古典派資本蓄積論批判の展開に注目せざるをえない。その際、スミス資本蓄積論に対するレイモンドの先駆的批判がリストに及ぼした影響にも、当然関心が払われなければならない。『自然的体系』執筆直後に自己の蔵書の中からわざわざパリに取り寄せたレイモンドやクーパーの著書を、リストが実際に再読したとすれ

24) Keith Tribe, "Die Vernunft des List. National Economy and the critique of cosmopolitan economy," in *Strategies of Economic Order: German Economic Discourse, 1750-1950*, Cambridge U. P., 1995, p. 56 (小林純他訳『経済秩序のストラテジー』, ミネルヴァ書房, 1998年, 70頁)。Cf. List, *Outlines*, in *Schriften*, Bd. , p. 108.

25) Tribe, "Vernunft," pp. 53; 60 (訳66; 74-75頁)。前述のように(脚注18), トライブ以前にニコルソンが、「諸国民の富」=「物的資本の蓄積」とする、スミス以後の古典派経済学のパラダイムの相対化を、『国民的体系』の特質の一つとしてあげる。もちろん、ニコルソンはレイモンドの先駆的な反蓄積論=「国民的富」論を知らない。Nicholson, "Introductory Essay," xviii.

26) List, *NS.*, pp. 254-55 (小林訳287頁)。

27) Sommer, *Lists System*, p. 96 n. 1. 『国民的体系』において「生産諸力の理論」は「完全無欠」(Vollendung)となる、とまで言う。Sommer, *Kommentar*, in *Schriften*, Bd. , p. 568.

ば、資本蓄積をめぐる両者の理論的対立の構図（前者によるその否定と後者によるその弁護）を見過ごすことなど、余程の節穴でもないかぎり、ありえないからである。『自然的体系』におけるリストの「想原」としてゾンマーが挙げたシャプタルや、別格扱いされるルイ・セーでさえも、古典派の説く資本蓄積の役割・意義を理論的に否定したことはないのであるから、『国民的体系』におけるリストの「想原」として、クーパーやケアリーとともに、レイモンドに再評価の目を向けるのは研究上当然の手続きである。

ところでこの点で、『自然的体系』から4年後に刊行された『リスト全集』第2巻の序文において、編者ノッツが行った指摘は、従来のゾンマーの見解から一歩も二歩も踏み出しているように見える。

「リストが概要（1827年）の執筆以前にレイモンドの著書を知っていたことを示す、いかなる直接の証拠も存在しないにもかかわらず、このことは絶対に確実なものとみなさなければならぬ、のではないだろうか。」<sup>28)</sup>（下線は引用者）

ノッツが挙げる状況証拠はいずれも良く知られている興味深い事実からなるが、とくに、『アメリカ経済学』の執筆と「同じ頃、リストがインガーソルによってデュパンへの注意を喚起されたのであれば、レイモンドの著書が、リストと彼のフィラデルフィアの友人達との会合の席で、たとえば、ハリスバーグ大会の間、話題にのぼらないということは、おそらくありえないであろう」（下線は引用者）、という指摘は非常に説得的である<sup>29)</sup>。実は、リストは、レイモンドの著書についてたんに知っていたというだけではない。ゾンマーによれば、入手時期は特定されていないものの、リストはアメリカで同書をすでに持ってさえいた<sup>30)</sup>。にもかかわらず、『アメリカ経済学』執筆以前に、リストが同書を実際に読んだ確証はないという結論で、リスト研究者は一致する。トライブでさえもこの点ではゾンマーに追従する<sup>31)</sup>。

しかしながら、このイギリスの経済思想史学者は、他方で、リストによる引用なり言及なり

28) Notz, Einleitung, in *Schriften*, Bd. , p. 58.

29) Ibid.. Cf. Friedrich List, "Philadelphia Speech," in *Schriften*, Bd. , p. 165. そこでリストが挙げた Charles F. Dupin, "Situation progressive des forces de la France depuis 1814," Paris, 1827は、同年7月パリで公開されたデュパンの著書 *Forces productives et commerciales de la France*, 2 vols. の序文の別刷り。Notz, Kommentar, in *Schriften*, Bd. , p. 425.

30) Sommer, Einleitung, in *Schriften*, Bd. , p. 141. ただし、根拠は示されていない。同様に、ゾンマーは、シャプタルの著書についてもリストが所蔵していたと指摘するが（p. 83）、やはり根拠を示さない。リストによる同書の翻訳計画については典拠を、このいわゆる「長論説」で、くりかえし挙げるのであるから不可解である。Cf. Ibid., pp. 53, 72, 122.

31) Tribe, "Vernunft," p. 47 (訳61頁)。W. O. Henderson, *Friedrich List, Economist and Visionary 1789-1846*, London: Frank Cass, 1983, p. 252.

直接の証拠が存在しない限り、「読んだという事実」を証明することにならない、とする論証方法を、「リスト全集の編纂者たちによって確立された伝統」と呼んで、その限界を指摘する。彼らは、「文書館資料に見出されることがらについては熱心に繰り返す述べるが、存在する資料に直接言及するだけでは解決することにならない重要な論点を挙げるができない」、からである<sup>32)</sup>。「レイモンド・リスト問題」がその好例である。筆者には、トライブが主張するように、ゾンマーが、レイモンドとリストとの間の「多面的な類似性」を指摘するだけで、なぜそれが生じたか、それ以上問わないのが不思議でならない。偶然の一致として片付けるにはあまりにも多くの類似点が存在するからである<sup>33)</sup>。

第一。スミスらの物的資本の万能視に対するリストの *ambivalence* は、渡米直前の手紙が示すように、『アメリカ経済学』以前から見られたが、『国民的体系』においてはじめて理論的に明確に、物的資本の蓄積と国民の生産諸力とを互いに矛盾するものとして、両者を並立的にではなく、対立的に把握するようになる。リスト以前に、レイモンドが、物的資本の蓄積を「個人的富」、国民の生産諸力を「国民的富」、とそれぞれ呼んで、両者を概念的に区別し、対立的に把握していたことが強調されなければならない。リストの「生産諸力の理論」には、レイモンドの反「節約」・「蓄積」＝「国民的富」論という先蹤が存在した<sup>34)</sup>。

第二。物的資本の蓄積と生産的労働との一体的把握・批判は『国民的体系』においてはじめて首尾一貫性を獲得する。『アメリカ経済学』のリストは、物的「資本の生産性」について論じることで、レイモンドによって批判されたスミスと、基本的には同じ土俵に立っていた。他方レイモンドは、スミスの「資本投下の自然的順序」論が、「労働の生産性」についてではなく、「資本の生産性」について論じるものだとして批判していた。『国民的体系』においてリストがはじめて、「労働の生産性」という言葉でスミスの資本蓄積＝生産的労働論を批判するようになるのはたんなる偶然だろうか。スミスにおける「労働の生産性」論の欠如、というレイモンドによるスミス資本蓄積＝生産的労働論への批判が、当否は別にして（ヘンリー・ジョー

32) Tribe, "Vernunft," p. 40 (訳83頁)。Sommer, Einleitung, in *Schriften*, Bd. , p. 55に端的にそうした立場が説かれている。この点小林昇氏もゾンマーへの不満を隠さない。「しかしわたくしには、たとえリストの直接の関説がないとしても、組織的植民論の中心人物であった...ウェイクフィールド...の文筆的活動が、外国の言論界の事情に通じていた彼の目に触れなかったことは断言し得ないと思われる。」同氏著『リストの生産力論』『著作集』：F・リスト研究 (1), 157頁。

33) Tribe, "Vernunft," p. 47 (訳61頁)。

34) 高橋和男「アメリカ国民経済学の成立——レイモンド『経済学論』における反蓄積論——」『立教経済学研究』57-2, 2003年および本稿(上)を参照。List, NS., in *Schriften*, Bd. , pp. 181-182, 254, 356 (小林訳206-207, 287, 403頁)。「国民の繁栄は、セーの考えるように国民が富すなわち交換価値をたくさん蓄積したらそれだけ大きいのではなく、国民が生産諸力をいじりくしく発達させたらそれだけ大きいのである。法律や公共の制度は、たとえ直接には価値を生産しないとしても、生産力を生産する。」(p. 182: 207頁)

ジによるヘンリー・ケアリー批判を見よ), 『経済学論』に存在した<sup>35)</sup>。

第三。たしかに、レイモンドは「生産(諸)力」(productive power (s))を術語として体系的に使用することはなかった(が、用語そのものは皆無ではない)。しかし、だからといって、ゾンマーが指摘するように、レイモンドに「生産力」の概念が欠けていたということにはならない<sup>36)</sup>。そうでなければ、『国民的体系』第12章「生産諸力の理論と価値の理論」の冒頭でリストが提起した、「富の原因は、富そのものとはまったく別のものである」という周知の命題に対し、リストによる「この生産力の規定は、レイモンドによる『国民的富』概念との類似性を有した」と指摘し、『経済学論』第2版第1巻第2章「国民的富とは何か」から3頁強にもわたり引用を行う必要はなかった筈である<sup>37)</sup>。

けれども、厳密に解釈するならば、第一、で述べたように、レイモンドの「国民的富」に比定されるべきリストの概念は「国民の生産諸力」であって、ゾンマーが問題にする(狭義の)「生産力」概念は、レイモンドの「効果的労働」に、形式上対応する。したがって、リストの命題に対応するレイモンドの文章を引用するのであれば、むしろつぎの文章を、ゾンマーは紹介すべきであった。

「つましい国民は通常はまた勤勉であり、そうした国民は、年々の収入を消費しなければならず、したがって、その富を節約によって増加させることはできないけれども、しかしながら、その効果的労働によって、すなわち、その土地耕作の改良によって——技術と科学におけるスキルを獲得することによって——家屋、作業場、道路、運河を建設することによって——そして、労働能力を高めることによって——生活必需品・慰安品を獲得するその能力[すなわち、国民的富]を増加させうるかもしれない。」(強調はレイモンド)<sup>38)</sup>

このようにレイモンドは、「労働能力を高めることによって」(by giving momentum to

35) 本稿(中)を参照。アダム・スミス自身は、「労働の生産性は主として[生産的]労働が用いられる場合の熟練と合目的性との程度に依存するということを、たしかに見抜きもしまた述べているのではあるが。…略…。/アダム・スミスは、全体からいえば、こういう諸力の性質をほとんど認識しなかったのだ、法や秩序の維持、教育や宗教心、科学や技芸の育成等々にたずさわる人々の知的労働にはけっして生産性をみとめなかった。彼の行った研究は、物質的価値を生み出すような、人間の行為に限定されている。」List, *NS.*, in *Schriften*, Bd. , pp. 175, 176 (小林訳199, 201頁)。Cf. *Ibid.*, p. 356 (小林訳403頁)。

36) Sommer, Kommentar, in *Schriften*, Bd. , p. 568.

37) Sommer, Kommentar, in *Schriften*, Bd. , pp. 563ff.

38) Daniel Raymond, *The Elements of Political Economy*. In Two Parts. Baltimore: F. Lucas Jr. and E. J. Coale, 1823, vol. , pp. 143 44.

the power of labor),あるいは、「国民の知的・肉体的諸力を増大させることによって」(by increasing the moral and physical powers of a nation)<sup>39)</sup>,といった表現で(狭義の)「生産力」を把握し,これを「効果的労働」と規定し,概念的に「国民的富」とは区別して使用している。その意味で,「レイモンドは、『効果的労働』の概念規定において,これに相当するリストの生産諸力の概念に——政治的力を除いて——疑いなく勝る」というゾンマーの別の注釈は,比較の基準を混同したものである<sup>40)</sup>。リストの「国民の生産諸力」に比定されるべきレイモンドの概念は,あくまでも「国民的富」であり,ゾンマーにはこの点で若干混乱が見られる。

第四。最後に,上記と逆に,リストは「国民的富」という術語の使用を,意識して避け続けた。「国民経済学」=「政治経済学」の樹立を標榜する以上リストが,「国民国家」(Nationalität)や「国民経済」(nationale Ökonomie)などとともに,「国民的富」(nationale Reichtum / Reichtum der Nation)についても,当然明確な概念規定を行い,考察した,と考えがちである。しかし,実際にはリストが,交換価値をもつ生産物からなる物的富の所有(と蓄積)——レイモンドのいわゆる「個人的富」——から区別されるべき,「生活必需品・慰安品を獲得する能力」,すなわち,ゾンマーのいわゆる「生産諸力の所有」を,レイモンドのように「国民的富」の概念によって考察したわけではない<sup>41)</sup>。これは,「蓄積」の場合と同様,この術語の使用を意識的に避けた結果ではないだろうか。すなわちリストは,レイモンドがほとんど組織的に使用しなかった「生産(諸)力」をキーワードとして体系的に用い,逆に,レイモンドがキーワードとした「国民的富」の使用を一貫して避けた,とは考えられないだろうか。リスト「生産諸力の理論」が——真に直感的理論であるか否かは別にして——「国民的富」を考察の対象とする「国民経済学」であるというサリーンの見解は,このように考えなければ成り立たない<sup>42)</sup>。

#### (4) 「レイモンド・リスト問題」の再審

本節の考察を通じて明らかになったゾンマー説の問題点を整理してみよう。

39) *Ibid.*, p. 147.

40) Sommer, Kommentar, in *Schriften*, Bd. , pp. 569; 575 76.

41) Sommer, *Lists System*, pp. 30, 78. ルイ・セーの富概念をリストが自分に都合よく解釈したように,ヘンダーソンも,リストのそれを潤色している。その『自然的体系』の英訳においてヘンダーソンは,“richesses”を“the national wealth”と意識するからである。Friedrich List, *The Natural System of Political Economy*, 1837. Translated and edited by W. O. Henderson, London: Frank Cass, 1983, pp. 151, 183 84, 186. Cf. List, *SN.*, pp. 456, 526, 532. トライブのいう原典の変更にあたる。Tribe, “Vernunft,” p. 59 (訳88頁注81)。

42) Edgar Salin, *Geschichte der Volkswirtschaftslehre*, 4., erw. Aufl., 1951, p. 130 (高島善哉訳『経済学史の基礎理論』,三省堂,1947年,242頁)。

a. ゾンマー説では、『アメリカ経済学』に見出されるリストの「生産諸力の理論」の(諸)萌芽は、「理論的構造を欠いたまま存在」していたにすぎない(a - 1)。「アメリカ経済学」は、それ故、「アメリカの事情に関する状況的著作」と規定される。『自然的体系』において「生産諸力の理論」は名実ともに兼ね備えたものになる(a - 2)。その呼称の最初の使用という事実に加え、リストのスマス生産的労働論批判がそこではじめて知的労働論として展開された、とみなされるからである。『自然的体系』以降、古典派経済学説批判を通じて「生産諸力の理論」はさらなる理論的發展を遂げ、主著の『国民的体系』に結実する(a - 3)<sup>43)</sup>。

ゾンマーに始まるこのような三段階把握は、枝葉はともかく根本において、その後ヘンダーソンや諸田氏によって継承され、通説化されたが<sup>44)</sup>、(a - 1)に関しては、本節(1)で紹介した『国民的体系』緒言におけるリスト自身の証言と真っ向から食い違う。また本節(2)での挙証によって、ゾンマーの主張は相対化されねばならない。「時論的性格が強い」とされた『アメリカ経済学』において提唱した米仏同盟論や米仏間農産物自由貿易論を、10年後に『自然的体系』においてもくりかえし説くのであるから、それらは「時論」というよりリストの持論とみなされるべきである<sup>45)</sup>。(a - 2)に関しても、完全な呼称の出現、という一点を除き、本節(2)で論証したように、ゾンマーの解釈は再検討されねばならない。

私見ではゾンマー説の最大の難点は、(a - 3)を可能にした、唯一と言わないまでも有力な要因として、リストによるレイモンドやケアリーやクーパーなどの著書の再読あるいは参照という契機が考慮されなければならないにもかかわらず、この出来事を逆のベクトルで把握することにある。つまり、自宅からこれらの蔵書をリストが取り寄せたのは、あくまでも、「懸賞論文の執筆後」であって、その執筆時にリストはそれらを参照していない、と『自然的体系』の独自性を擁護することである(nach は原文ではイタリック)<sup>46)</sup>。しかし、だからといって、(a - 3)を説明しうる有力な要因から目を背けるのはあまりにも後向きである。

本節(3)で論じたように、スマスやセーらの学説に対するリストの批判が、たんに彼らの資本概念というよりは、資本蓄積論に集中したという筆者の解釈が成り立つとすれば、『自然的体系』執筆後にリストがレイモンドやクーパーの著作を取り寄せた事実は重大な意味を持つ、と考えざるをえない。『国民的体系』における「スマス節約理論」批判、「諸個人の私経済(学)」批判といったゾンマーの挙げるその理論的特質が、何に由来するのか、誰に影響されたものなのか。すなわち、『国民的体系』におけるそうした古典派蓄積論批判という最大の理論的特質

43) Sommer, Kommentar, in *Schriften*, Bd. , p. 568.

44) List, *The Natural System*, Editor's introduction. 諸田『フリードリッヒ・リスト』。

45) List, *SN.*, chs., 5, 8, 17, 26, 27. 小林昇「フリードリッヒ・リスト」『小林昇経済学史著作集』: F・リスト研究(1), 未来社, 1978年, 66-67頁, とくに注(12)の記述は、この点で、訂正されねばならない。

46) Sommer, Kommentar, in *Schriften*, Bd. , p. 568-69.

が、レイモンドの著書の影響を抜きにして、はたして可能であったのか<sup>47)</sup>。(a - 3)における「生産諸力の理論」の彫琢過程でも再び、『アメリカ経済学』の場合と同じように、資本蓄積をめぐるレイモンド対クーパーという対抗軸がリストの座標軸となったと想定することは決して突飛ではない(本稿(上)を参照)。通説はこのような観点からの見直しが求められる。

b. ゾンマー説では、リスト「生産諸力の理論」の形成にクーパーがはたした役割を、あくまでも敵役としかみない。しかし、本節<sup>(2)</sup>で見たように、(a - 1)におけるクーパーのリストへのありうべきポジティブな影響を過小評価すべきではない。自由放任を唱え、「国民」概念を否定するクーパーを、リストは『アメリカ経済学』において格好の敵役、反面教師、に仕立てたが、そのスミス蓄積論擁護とスミス生産的労働論批判とに関しては一切言及を避けた。しかしながら、リストが、クーパーの著書におけるその隠されたレイモンド批判を通じて、レイモンドの「国民経済学」すなわち、反節約・蓄積 = 「国民的富」論を読み取った可能性とともに、リストがその「マカロック張り」のスミス生産的労働論批判を、クーパーから直接摂取した可能性は決して否定できない<sup>48)</sup>。クーパーは、「国民的富の源泉」という視点から、スミスの生産的労働概念を批判してつぎのように述べた。

「アダム・スミス博士が提起する意味で生産的ではなくても、労働は生産的に支出されるし、個人ならびに国民の富を著しく増大しうる。

「ワット氏が、理論の研究と、彼が蒸気機関に加えたありとあらゆる改良を実現する手段の工夫とに、彼の時間を割いたとき、彼は彼自身の富とともに、国民的富の基礎を築いたのであった。」<sup>49)</sup>

『アメリカ経済学』第6信でリストは、クーパーに倣ってか、が、名前を出すことなく、「フルトンのような発明家は、全財産を実験に使い果たすかもしれないが、国民は、彼の努力から巨大な生産力を引き出すことができる」、と書き、同第5信では、「ウィスキー製造は弱さの生産であって、力の生産ではありません」、と書いて、『自然的体系』における第3章「生産諸力の理論」での議論に先鞭をつけただけでなく、生涯にわたる「クーパー隠し」に手を染めたのであった<sup>50)</sup>。

しかしながら、本稿(上)で論じたように、クーパーでさえも、スミス生産的労働論批判の

47) Sommer, *Lists System*, pp. 16-17. 本書にはレイモンドへの言及が全く見られない。

48) 本稿(上)を参照。前掲脚注20)を見よ。

49) Thomas Cooper, *Lectures on the Elements of Political Economy*. Columbia, S. C.: Doyle E. Sweeny, 1826, p. 106.

50) List, *Outlines*, in *Schriften*, Bd. , pp. 128, 126. List, *SN.*, p. 190 (Eng. p. 34)。フルトンはクーパーの著書に少なくとも2回登場する。Cooper, *Lectures*, pp. 35, 105.



一点で、レイモンドの「国民的富」概念への譲歩を客観的には示したのであり、スミスや「学派」の理論を盲信していたわけではなかった。上記「生産諸力の理論」章の脚注で、「アメリカの著名な国民経済学者」と、リストがクーパーを呼んだのは、思わず洩らした本音ではなかっただろうか。ゾンマーは、「クーパー隠し」というリストの意図を見抜けなかったばかりか、「リストの奸計」にはまってしまっている<sup>51)</sup>。

c. 「レイモンド・リスト問題」に関するゾンマーの見解は、彼の主著の中には全く現れず、小林昇氏が「長論説」、「小論説」とそれぞれ呼ぶ、『リスト全集』第4巻序文および『フリードリッヒ・リスト協会報』掲載論説(これは『全集』第6巻『国民的体系』への序文の意味をもつ)、に拠ってこれを知ることができる。両文献については小林氏による紹介がすでにあるので<sup>52)</sup>、ゾンマーが「小論説」と平行して執筆した『国民的体系』への詳細な注釈において示したはるかに踏み込んだ彼の見解を紹介したい。

「1838年の手紙から知られるように、レイモンドの著書はリストの蔵書に含まれていた。リストへのレイモンドのありうべき影響に関する最終的な判断は、アメリカ時代の他のリストの論稿についての未だ決着のついていない、完全な知識を俟って下す以外にない。『概要』以前に[リストが]知っていたという証拠は、これまで挙げられたことがない。かりに1827年以降になって初めて、リストがレイモンドを読んだとしても、その影響はやはり決して高くは評価できない。リストはレイモンドの名を挙げたことがない。多面的な類似性にもかかわらず、(たとえばフェリエの場合と同様)直接の継承関係は、はっきりとは証明されていない。

レイモンドは思索家であり、リストは精力的な文筆家である——レイモンドは、彼の諸概念の、とくに国民の一体性と国民的富という概念の鋭くかつ体系的な使用において、節約原理の徹底した否定において、総じて個人経済原理と国民経済原理の鋭い区別において、多くの点でリストよりも優れていることを示した。恒久的労働(前出の效果的労働と同じ -

51) List, *SN.*, pp. 190, 192 (Eng. p. 34). ちなみに “un celebre economiste national de l’Amerique” という原文を、ヘンダーソンは “distinguished American economist” としか訳さない。前掲脚注41)と好一対である。ゾンマーは、「トマス・クーパーは、彼の敵対者の立場を、嘲笑的に『わが国民的体制』と呼ぶ」と書くが、誤解もはなはだしい。Sommer, *Lists System*, p. 15 n. 1. 「わが国民的体制」は、敵対者ではなく、クーパー自身の立場を表明したものである。ただし、この句は、クーパーの著書の初版には存在せず、ゾンマーはその第2版(1829年刊), p. 24に拠って引用した。参考までに、クーパーの経済学の定義を紹介しておく。「経済学とは、国民的富の源泉、分配、蓄積、および消費を考察する学問である。」Cooper, *Lectures*, p. 16 (2<sup>nd</sup> ed., p. 22)。定義に生産が含まれないだけではなく、クーパーによる「国民的富」の語の使用にも注目したい。

52) 小林昇「リストと重商主義」の第2章「リストと『ブリティッシュ・マーチャント』」、『著作集』Ⅱ: F・リスト研究(1), 355-72頁。同『全集』以後のリスト研究の「二 生産力論の想原」、『著作集』Ⅱ: F・リスト研究(3), 1979年, 120-30頁。

引用者) についての彼の概念形成と使用(下記の引用を参照...省略...)は、リストの生産力と異なり、そしてより明快である。にもかかわらず、リストの著書はまさにこれらすべての創造力豊かな概念形成に従ってはいない。[以下2段落省略]

「リストの『国民的体系』におけるレイモンド特有の諸概念との思想的類似性は、『概要』におけるリスト独自の体系への最初の到達後初めて、リストがこのアメリカ人の著作を知ることになった、という想定を起こさせる<sup>53)</sup>。」(下線は引用者)

たしかに小林昇氏が「小論説」の紹介において、「レイモンドの 活力なき 著作」という言葉を引いて、ケーラーのレイモンド想原説を一蹴したことはある<sup>54)</sup>。だが、レイモンドの『経済学論』の独創性を他方でこのように高く、的確に評価するゾンマーのコメントが客観的に紹介されることはこれまでなかったのではないだろうか。筆者が旧稿において「反蓄積論」と呼んだレイモンドによる「節約原理の徹底した否定」は、スミスの理論体系を、その精神的・物質的土台という根底から批判する意図を秘めていた。さまざまな理論的難点を含みながらも、レイモンドの意図それ自体は誤解の余地がない。ゾンマーが『経済学論』の独創性のひとつにスミス蓄積論批判を挙げえたのはさすが、と言わざるをえない。とはいえ、他方でリスト「生産諸力の理論」の独創性の擁護に固執するゾンマーが、『国民的体系』におけるスミス「節約理論」批判の源泉としてレイモンドの名を挙げることは決してない<sup>55)</sup>。

しかしながら、そのゾンマーにしても引用文末尾の下線部では、『国民的体系』に現れた思想的特質の形成に、リストの レイモンド体験 ——厳密には再体験——が何程か関わった可能性を示唆しているようにも受け取れる。すでに『自然的体系』への注釈においても、「まず自然的体系において、ついで、国民的体系において、レイモンドと平行した理論が、広範囲に展開をみる」(強調は引用者)、とゾンマーが指摘していたことが想起されねばならない<sup>56)</sup>。その中に、本節(2)で取り上げたスミス生産的労働論批判、および同(3)の古典派資本蓄積論批判の展開が含まれることは言うまでもない。その3年後、ゾンマーはさらに一歩踏み込んで、『国民的体系』に現れたリストとレイモンドとの間の多面的な思想的類似性の原因を、リストの レイモンド(再)体験 に関わらせて捉えるようになった、と筆者は推理するのであるが、いかがなものであろうか。

53) Sommer, Kommentar, in *Schriften*, Bd. , p. 564.

54) 小林「『全集』以後」、126頁。氏の引用の仕方は不適切である。ゾンマーは、「この著作は根源的な思想と独自性とを豊富に含んでいるが、概してその叙述の仕方は影響力に欠ける」、と書いているからである。Artur Sommer, “Über das Wachstum der tragenden Gedanken des Nationalen Systems,” in *Mitteilungen der Friedrich List-Gesellschaft*, Nr. 12, 1930, p. 364.

55) Sommer, “Wachstum,” pp. 350 51.

56) Sommer, Kommentar, in *Schriften*, Bd. , p. 569.

## 6. 結論：レイモンドの復権

以上、『リスト全集』の刊行によって、いわば物理的に、結審となった「レイモンド・リスト問題」に再審の光をあててきた。リスト研究者によって主導されてきたこの問題をめぐるわが国の研究史において、驚くべきことに、一方の当事者、レイモンドの著作がまともに取り上げられ、吟味されたことはかつてない。まして、クーパーやケアリーらレイモンドの周辺に位置する思想家の著書が顧みられることなどなかった。これが筆者に再審を思い立たせた動機である。本稿を通じて、独り「レイモンド・リスト問題」に限らず、『リスト全集』編者の作品解題(序文)や注釈に安易に依拠したリスト研究の問題点が、具体的な形で少なからず明るみに出たのではないだろうか。

もちろん、リスト『国民的体系』成立史への接近は、「文献調査旅行」の名目で渡航を許された亡命先で遭遇したアメリカ国民経済学というルート以外にも多くのルートが存在する。小林昇氏によって「リストの最も深い淵源」とされたメーザーらの“deutsche Quellen”の開拓が目覚ましい勢いで進んでいることは喜ばしい限りである<sup>57)</sup>。欲を言えば、さらに、イギリス・ルートはもとより、フランス・ルートの開拓が望まれる。『自然的体系』における「思想的源泉」として通説が最も高く評価するシャプタル、デュパン、ルイ・セーといった人物の著作でさえ、ゾンマーの解釈をただ引き写したような紹介しかなされていないのが日本のリスト研究の現状である。本稿(中)では『アメリカ経済学』成立史との関連で不可欠な、シャプタルとルイ・セーの著書に限り考察を加えたが、デュパンやフェリエらについては他日を期すほかなかった。とはいえ、アメリカ・ルートのいっそうの開拓が、『国民的体系』成立史研究を前進させるための依然重要な学史的課題である、と著者は確信する。

「レイモンド・リスト問題」に関するゾンマーらの解釈のうち、今日なお命脈を保っているかに見えるのが、『アメリカ経済学』執筆(=1827年)以前に、リストが、レイモンドの『経済学論』を読んだ確証はない、というレイモンド想原説の否定論である。一方でアメリカ時代に同書をリストが所有していた事実を認めるゾンマーも、この一点だけは譲らない。けれども、ゾンマーの「小論説」後に刊行された『リスト全集』第2巻序文で编者コッツは、公刊されたばかりのデュパンの著書『フランスの生産的・商業的諸力』についてインガーソルから情報を得たリストが、それ以前にレイモンドの著書についても同様に情報を得ていなかった筈はない、と推測する。妥当な推理と言えるのではないだろうか。

同様に、「経済学の最初の著作を(しかも英語で)書くという仕事に直面したリストが最新のアメリカの文献を手引にした、と仮定することはしごく当然であろう」というトライブの

57) 坂井榮八郎『ユストゥス・メーザーの世界』、刀水書房、2004年、付論 を参照。

推論も傾聴に値する<sup>58)</sup>。本稿(中)で筆者は、必ずしも明示的ではないが、これらの仮定に立って、『アメリカ経済学』におけるありうべきレイモンド『経済学論』の思想的影響を、支配的理論と原理的に対立する両著の理論構造(=構図)の相似性という観点から、明らかにしようと試みた。それが成功しているか否かは読者の判定に委ねるほかないが、かりに筆者の結論が妥当性を持つとすれば、通説とは異なり、リストはレイモンドの著書を『アメリカ経済学』執筆以前あるいは執筆中に読んで参考にしていた、ということになる。

本稿(下)では、パリで『国民的体系』に向け勉強を始めたリストが、自宅の書庫から取り寄せたレイモンドやケアリーやクーパーらの著書を再読した、つまり、それらを参考にしなかった筈はない、という仮定のもとに、「アメリカ国民経済学」がリストに与えた影響を明らかにすべく、論点を資本蓄積論にしばり、論証に努めた。『自然的体系』の擱筆から『国民的体系』執筆に至る、パリ時代のリストのレイモンド(再)体験に関し、ゾンマーは頭から否定しないまでも、前述のように、最後まで慎重な言い回しに終始した。また筆者にしても、ゾンマー信奉者を納得させるに足るリストによる引用や言及といった確証を提出できなかった。しかしながら、『国民的体系』におけるスミス生産的労働論批判にしろ「節約理論」批判にしろ、それらをことごとくリストの独創とみなし、レイモンドやクーパーの影響を過小評価するゾンマーの一方向的な主張が受け入れ難いことも確かであろう。

本稿(上)で明らかにしたように、1820年代のアメリカにおいて、レイモンド(=ケアリー)対クーパー(=スミス)という、国民経済学の対抗軸(alternatives)の争点を形成していたのが、スミスの生産的労働論であり、蓄積論であった。リストは、「1820年代後半にアメリカの経済政策論争に遭遇した」というだけではなく、『国民的体系』を準備する過程で、かつての論争当事者との再会をはたしたのである<sup>59)</sup>。ゾンマーが重視する『自然的体系』が、「生産諸力の理論」の名称その他の点でどのような意義をもとうとも、主著に刻印された基本的性格が、リストの最初の体系的著作である『アメリカ経済学』にさかのぼって見出されることは、否定しがたい<sup>60)</sup>。従来、『自然的体系』に始まるとされてきた国民経済発展段階説ですら、本

58) Tribe, "Vernunft," p. 48 (訳62頁)。

59) Tribe, "Vernunft," p. 65 (訳79頁)。「クーパーとレイモンドのテキストによって提供された政策と理論とにおける明確な対抗軸を、ヨーロッパは19世紀末に至るまで持たなかった。」1820年代に、狭義の資本概念——「富のうち、富の再生産のために充当された部分」——から、レイモンドの「国民的富」概念——「国民の生産能力全体」——へ力点が移動したと指摘する Janet A. Riesman, "Republican Revisions: Political Economy in New York after the Panic of 1819," in William Pencak and Conrad E. Wright eds., *New York and the Rise of American Capitalism...*, New York: NHS., 1989, p. 34を参照。

60) 『国民的体系』にかかわるつぎの指摘は、『アメリカ経済学』にも妥当するであろう。「交換価値の分析から経済理論の体系を樹立しようとし、資本主義における蓄積の構造をあきらかにしようとした、スミスの経済学の本質を、原始蓄積の推進者だったリストはついに理解することがなかった。」小林昇「リスト『国民的体系』の邦訳にあたって」、『著作集』：F・リスト研究(3), 455頁。アメリカ

稿(上)で詳論したように、既にそこに明確な形で存在した<sup>61)</sup>。その意味では、『国民的体系』は文字通り『アメリカ経済学』への先祖返りであった。

もちろん、その「国民経済学」すなわち「政治経済学」を、「価値の理論」が妥当する「個人経済学」と「世界主義経済学」、この両者を媒介する中間理論として位置づけ、その中核たる「生産諸力の理論」に帝国主義的な経済発展段階説を組み込むことによって、両理論の並存・棲み分けを暗黙の前提にしたリストの交互的体系は、レイモンドの二者択一的・排他的な「国民的富」論にはない実用性を備えている。また、世界史的視野からの歴史、法、制度、宗教、思想、文化についての『国民的体系』におけるリストの澆刺とした考察と叙述は、さまざまな悪意や時代的偏見をも含め、レイモンドの「アメリカ的体系」には求むべくもないスケールと抗しがたい魅力を有している。生涯を通じて、法廷弁護士というより、一介の書生同然の生活を送ったレイモンドと、度重なる逆境をくぐり抜けてきたリストとの人生経験上の差は、われわれの想像を絶する<sup>62)</sup>。

レイモンドの『経済学論』がリストの著作が持つような人を鼓舞する力を欠いたことは否定しがたい。しかし、実際のささか退屈な著作ではあるが、他方で、「根源的な思想と独自性を豊富に含んでいた」こともまた紛れもない事実であって、それらが具眼の士によって見逃されることなどありえなかった。レイモンドの著書がリストによって黙殺されたのは、それが「活力なき著作」であったからではない。それにもかかわらずリストはこれに依拠せざるをえなかったからであり、また、その結果として、自己の体系がこの無名の先覚者のそのの換骨奪胎であることを、人に悟られまいとしたからである。このように「レイモンド・リスト問題」を解釈することが、本稿で提出したあらゆる「証拠」に照らし、最も整合的である。ゾンマーは、独創的な思想家として擁護することに腐心するよりは、諸思想の arranger としてのその本領を、すなわち政策思想家としてのリストの卓越した能力を評価すべきであった。

(完)

---

時代にリストが手にした(筈の)『経済学論』もまた、筋金入りの共和主義者にして原始蓄積の推進者レイモンドが著した、資本蓄積批判の書であった。

61) 小林昇『全集』以後、120頁；同「フリードリッヒ・リスト」66-67頁；同「リストと『ブリティッシュ・マーチャント』」367, 393-94頁などを参照。このような筆者の評価は、『アメリカ経済学』では…歴史的・一回性が見方が優勢である」というゾンマーの解釈と矛盾するものではない。Sommer, *Lists System*, pp. 92ff.

62) 憑かれたように目標(たとえば大学教授)の実現に邁進していたかに見えたリストが、その成就を目前にして突如全く別の目標(たとえば実践活動)に心を奪われ、いともあっさり初志を放擲してしまう。諸田氏の『フリードリッヒ・リスト』はリストの全生涯を特徴づけるこのような彼の elusive な性格と行動をあぶり出す効果をあげている。

## 謝 辞

本稿で引用したドイツ語文献の翻訳に関して小笠原茂立教大学名誉教授に御教示を仰いだ。記して感謝の意を表したい。言うまでもなく、なおありうべき誤解や誤訳はすべて筆者がその責めを負うべきものである。